

さくらそう通信



阿部家伝来の扇面散図屏風（白河集古苑所蔵）

扇面桜草図（阿部家伝来の扇面散図屏風部分）



江戸時代の大名・阿部家の屏風に サクラソウを見る

磯田 洋二

福島県白河市には南湖公園・小峰城・白河の関などの名勝・史跡・文化遺産がたくさんあって、『歴史と文化のまち』として知られています。そして、たくさんの文化遺産を保存管理し展示するための白河市歴史民俗資料館や白河集古苑という立派な施設があります。南湖公園の隣にある白河集古苑では、平成8年に「近世大名阿部家の遺宝展」が開かれました。

ここに登場する阿部家は、三代將軍家光に老中として仕えた阿部忠秋の代に徳川の譜代大名となった家柄で、寛永12年（1635）からの約4年間を下野壬生城（現在の栃木県下都賀郡壬生町にあった城）の城主として、寛永16年（1639）からの約184年間を武蔵忍城主として、文政6年（1823）からの約45年間を白河城主として過ごしています。武蔵忍城は現在の埼玉県行田市にあった城ですから、埼玉県とは浅からぬ縁があった訳です。

かって埼玉にいた譜代大名ということに興味をもったので、この展示を見に行きました。そこには武家としての武

具・衣服・装身具のほか、書画、絵図、文具、茶道具、陶磁器などいろいろな物品がたくさん展示されていて、そのどれもが譜代大名を忍ばせる立派なものでした。その中にこのたび紹介する屏風があったのです。（上 写真）

その屏風は江戸時代に作られた扇面散図屏風と呼ばれるもので、6面（個）に折り曲げられる縦170cmに横382cmの金屏風で、両面に合計で61面（個）の扇が描かれています。扇のそれぞれには彩色された絵が描かれていて、思わず一つ一つを丹念に見てしまうという作品なのですが、残念なことに誰が描いたのかわかっていません。絵には山水、花鳥、人物などいろいろと描かれていて、それだけでも楽しめるのですが、人物の画題には風俗・物語・道釈（人の守るべき正しい考えを説くこと）などが取り上げられていて、いつまで眺めていても見飽きることのないものでした。

一つ一つの扇絵を目で追いながら観賞していると、なんとサクラソウの描かれている扇絵があるではありませんか。サクラソウは扇の中いっばいに3株も写実的に描かれているのです。細かく観察すると、左端のサクラソウには7枚の葉と、3個の花と1個の蕾をつけた1本の長い花茎があり、その脇に1個の花と2個の蕾が描かれていて、もう1本の短い花茎があることを思わせます。中央のサクラソウに

は10枚の葉と、4個の花と4個の蕾をつけた1本の長い花茎があり、その脇に2個の花と2個の蕾が描かれていて、ここに1本の短い花茎があることを想像させます。そして、右端のサクラソウには7枚の葉と、3個の蕾をつけた1本の花茎があり、その脇に2個の蕾が描かれていて、1本の花茎があるように描かれています。3株とも大きな葉が7枚以上もあって、花茎が2本ものびていることから、とても良く育った大きな株を描いたものでしょう。しかし、どの株にも花茎が1本しか描かれていないので、脇に描かれている花や蕾は、絵に賑わいを与えるために付け加えて描いたものかも知れません。

ところで、描かれているサクラソウの葉を見ると、表側を濃い緑色で描き、裏側は白い緑色で描いてあるので、実際のサクラソウよりも表と裏の色の違いが強く表現されていて、サクラソウとは別の種類のように見えます。しかし、葉面の幅と長さの比率、葉身と葉柄の長さの比率、葉脈と葉脈の間が盛り上がっているようす、縁の鋸歯（ぎざぎざ）のようすのどれをみてもサクラソウの特色を正確に示しているのです。間違いなくサクラソウを描いたものです。次に、花を見ると、花の形や咲き方は野生種に多く見られる広い桜弁（桜の花びらの形の花弁）の平咲き（平らに開く咲き方）で、受け咲き（上向きの咲き方）になっていますが、花の色は野生種のような紅色の単純な花ではなく、薄い桃色に底桃色（花の中央の部分が桃色）と目白（花の中心が白）の現れた複雑な花になっています。また、花の大きさは直径3cm~4cmほどの中輪で、野生種より少し大きいことが、描かれている葉と比べることでわかりました。これらの花の特徴から、描かれているサクラソウは野生種ではなくて園芸品種であることが明らかです。サクラソウを栽培して園芸品種を作り出すことは、江戸時代に盛んに行われるようになったので、この扇絵も栽培されていたサクラソウの園芸品種を描いたものだと思います。

そこで、描かれたサクラソウの園芸品種の名前を調べることにしました。江戸時代に育てられたサクラソウの園芸品種は300以上も記録されていますが、その多くは消滅して、現在まで伝えられているのは60以下なので、描かれたサクラソウはすでに消滅している場合もあります。また、サクラソウの園芸品種は、花の裏側のようすや雌しべの長さなどもわからないと正確に調べられないので、描かれたサクラソウのように花の表側だけでははっきりとしない場合もあります。このような条件がつかいましたが、今までにわかったことを手掛かりにして調べたところ、江戸時代後期に作り出された『夕映（ゆうばえ）』という名前のサクラソウにとても良く似ていることがわかりました。改めて、屏風に描かれた扇絵を見渡すと、ほかの絵に比べてサクラソウは大きく描かれていることに気付きました。当時流行っていたサクラソウなので、目に付きやすいように描いたのかも知れません。

阿部家が城主であった武蔵忍城の付近には、東方にあった小針沼の沼尻の湿地や、北側を流れる忍川に沿った谷郷の湿地にサクラソウの自生地があったと伝えられ、また、明治3年（1870）に出版された藤森大雅の「記三浦氏草桜」という記事に、忍藩の御殿医であった三浦泊翁が多くの変化に富んだサクラソウを栽培して観賞していたと述べられています。あるいは、忍城にもサクラソウが栽培され観賞されていたかも知れません。そして、そのサクラソウが、御殿医の三浦泊翁が栽培したサクラソウが、屏風の扇絵として描かれたのかも知れません。このように資料を基にして想像すると、話が次々にふくらんで面白くなります。

江戸時代には多くの絵図にサクラソウが描かれています。そのことの多くは広く知られています。しかし、阿部家の扇面散図屏風に描かれているサクラソウについては、余り知られていないようなので、ここに紹介させていただきました。

最後に、阿部家の扇面散図屏風を紹介するにあたり、資料の利用を快く許可してくださり、また写真の撮影をしてくださった白河集古苑館長の鈴木敏行様はじめ学芸員の方々、そして、白河集古苑所蔵資料の特別利用に必要な許可の申請や、利用する写真の撮影を学芸員の方にお願ひするなどの労をとっていただいた白河市在住の芳賀智恵子様、記して感謝申し上げます。

消えるさくらそう自生地・蘇る自生地

吉岡 義雄



藤原町(栃木県)の自生地 (平成12年撮影)

さくらそう通信第3号で、信州で絶滅寸前のさくらそう自生地を自費で買取り、一命をかけて守り抜こうとした一老人の快挙を発表した事がある。その後どうなったのだろうか？ 老人は、さくらそうが、日本のどこかで咲き続ける夢を描きつつこの世を去った。かつての自生地には砂防ダムが完成し、周囲の環境は一変した。このことは、防災上の立場から人命を優先し「脱ダム宣言」を唱える現知事の発想の原点の一つであろうと思う。しかし、この老人の努力は地元や全国のさくらそう愛好家に受け継がれ、鉢の

中で、或いは開拓地の山村で生き続けている。里帰りのできないさくらそうは、新しい土地でも生地のように健全な発育を続け、美しい花を咲かせて人の心を和ませて、人の力を借り未来に向けて増え続けるはずである。

このような事は身近かなところにも多く存在する。荒川の流域にはかつて幾つもの自生地が存在したが、都市化、開発等次々に消えた。なかでも戦時中、オリンピックのボートのレース場として国の政策により全滅してしまったさくらそう自生地はあわれであった。しかし当時の地元の愛好家により花は育てられ、今は全国の愛好家で栽培されている。又、荒川の流域では自生地を復活させようとして、公園の主賓として努力しているところもある。さくらそうは、人々に生活の場を与え繁栄させたのと引き換えに人の力を借りて生き続けようとしている。これは重要な事であり、花のためにも人間は努力を惜しんではならないと思う。

さくらそうは、日本各地に自生したが、花の美しさ以外は家畜の餌にもならない。しかし、これが幸いしてどこにでも自生し生き続けていた。都市化が進むにつれ、山村でも林道・農道が舗装され道端のさくらそうは壊滅し、山の中や川のほとり、水田の畦道で生き続けているのが現状である。今生きているさくらそうは、そのまましておけば増えるはずである。春になると山菜とりに来た人が美しい花を見て採ってしまうと云う話をあちこちで聞く。また、さくらそうがレッドデータブックの絶滅の品種だと云う事が知れ渡り、園芸業者にとって商品価値が高まり、買い集める者も居ると聞いている。山菜と花、セットになって消えて行く。山菜は又次の芽が出てくるが、さくらそうは抜かれてしまうと次は芽が残っていない限り出て来ない。従って名も無い自生地のさくらそうは次々と消えて行くのである。もちろん、その土地の人達により庭先等で保護され中には以前よりも立派な自生地となっているところもあるが。

国の方針は保護育成を求めている。その主旨を理解し実行に移している自治体では、保護育成に大変な努力をしている。しかし大部分の自治体で主旨を理解しても管理できないのも止むを得ない事かも知れない。自生地を持つ集落では共同で盗掘を防止しているところもある。私もかつて東北の或る自生地に何年か続けて見学に行った事がある。高い運賃を払っても、沢山のさくらそうに囲まれる環境が心を慰めてくれるのである。ところが、年々その数が減り、遂に一本のさくらそうも見ることができず、それ以来行っていない。又、或る人の話では、かつて東北の名山の自生地が絶滅してしまい誰もいないものと思っていた。ところが、道路ができ、ロープウェイができて、かつての登山道は附近の人達しか利用しなくなった。久方に登山道を登ったところ、かつての自生地のさくらそうが復活していたのに驚いてしまったそうである。喜ばしい事実である。

又、やはり東北の個人所有の自生地で、花の数が少なく

なったので専門家の意見を求めたところ、下草を刈れば良いと云うので下草を刈り取ったところ沢山増えて喜んだのも束の間、盗掘に会ってしまい、囲いを作って入れないようにして守ったと云う話も聞いている。

一方で、開拓地へ芽を送ったところ、気候条件等が合っていたのか、ものすごい勢いで増えているとも聞いている。野生種の花は環境に順応し子孫を残す習性があるように思える。この特性を生かして管理すれば、さくらそうは元気に地球の花として繁栄するに違いない。ただ鉢の中で栽培された野生種は、他の園芸種と同様、きめの細かい管理が必要となってくる。本来、野生種は野や山で育つのが一番の幸せだと思う。さくらそうは地下の芽からも種からも増える特徴がある。一本でも地上で残る事ができれば、やがて沢山の仲間を作って行くはずである。

さくらそうの仲間は世界中に沢山の種類が存在する。そのなかで、日本のさくらそうは風や川の流れを利用し周辺や下流の土地へと自生地を作って行った。現在の都市化・環境の変化はこの方程式では答は出てこない。人の力で逆に成長の場を作ってやらなければ、生きていけないのも現状である。このことを考えると荒川の流域の各自治体における、それぞれ特長のある新しい自生地を作ろうとする方策は、的を得た事業と云える。根本的に云えばさくらそうの立場に立って一人一人が花を愛する事から生まれるものである。そして花を育てる努力を惜しんではならないと思う。更にこの運動は次の世代へ、又次の世代へと引き継いで行かねばならない。それが又国民の義務ではないかと思う。さくらそうは永遠に不滅であると胸を張って云えるように頑張ろうではありませんか？

こんな事を考えると、田島ヶ原のさくらそうは特別天然記念物であり、都市化と同居し騒音等の悪条件の中、しかも海拔10米の地点で咲き続けている事が自然界の宝物である。我々は身近にあるこの花園を決して絶やしてはならない。将来も現在以上に光輝く事を祈って止まない。

(さくらそう愛好家)

姿を消したウマノスズクサ

磯田 洋二

田島ヶ原サクラソウ自生地には、約250種の野生植物が生育しています。サクラソウ自生地の中では、至る所に多数生えているヤブガラシ・ノウルシ・オギのような植物がある一方で、ノコンギク・トモエソウ・オニユリのように狭い範囲に少数しか生えていない植物もあります。多数生えていけば普通に見られる植物で、少数しか生えていなければ稀にしか見られない植物ということになりますが、植物について普通に見られるとが稀に見られるというような区別は、その植物の生育している場所によって異なるもの



①ウマノスズクサ [花は花弁がなく、かくがラッパの形になっている] (平成11年8月12日撮影)

です。例えば、サクラソウ自生地で見られるサクラソウ・ノカラムツ・チョウジソウなどは、いわゆるレッドデータブックによる「絶滅が危惧される植物」とされていて、他では稀にしか見られない植物なのです。そして、サクラソウ自生地では稀にしか見られないツボスミレ・カヤツリグサ・ヤブランなどは、他の場所では普通に見られる植物といえます。

さて、他の場所ではやや普通に見られるのに、サクラソウ自生地の中では稀にしか見られない植物の一つに、ウマノスズクサ科のウマノスズクサがあります。なにしろ、サクラソウ自生地にはウマノスズクサの生える場所は一か所しかなく、しかも1m²くらいの範囲に10株ほどが生えるだけです。サクラソウ自生地の中では大変に貴重な植物として特別に注目していました。また、8月には変わった形の花を咲かせるので、その花を観察するのを楽しみにもしていました。(写真①)

このように、少数しか生えていない植物は、少し環境が変化したり生存競争(生きるために他の生き物との間に起こす争い)に負けたりすると、突然絶滅してしまうことがあるので、特に生育のようすには注意を払っています。ウマノスズクサは多年生のつる草で種子と地下茎によって殖えるのですが、サクラソウ自生地での10年間ほどの観察では、花が咲いても種子の実ったことはなく、地下茎によっても特に殖えも減りもしていないのです。そんな訳で、観察する度にもっと殖えれば良いのにと考えていました。

平成12年も例年のようにサクラソウ自生地の見回りをし、植物の生育状況を観察していました。ところが、9月19日に見回ったときにウマノスズクサが見当たらないのです。8月中旬に見回った時には、草丈は2m近くになっていた花や蕾がついていたのを確認しているのですが、同じ場所にはカナムグラ・ヒルガオ・ヤブガラシ・ガガイモなどのつる草が茂っているだけです。探す場所を間違えたのではないかと、あちこち探したのですが、この日はいくら探しても見つかりません。今まで、このようなことは無かったので、なぜ見つからないのだろうと疑問に思いながら、次の植物の観察へと移動しました。

見回りが一通り終わった時、見つからないウマノスズクサ

が気になって探しに戻りました。そして、何気なく足元を見た時です。何と、そこには前羽の片側が無くなっていますが、紛れもないジャコウアゲハの死骸が落ちていたのです。



②ジャコウアゲハの死骸 [羽の色が灰褐色で、裏面の斑紋が黄褐色なので?] (平成12年9月19日撮影)

(写真②)

ジャコウアゲハの死骸を見た時、一瞬のうちにウマノスズクサがジャコウアゲハの食草(食餌となる植物)だったことを思い出しました。そして、ジャコウアゲハに葉を食われて茎だけになったウマノスズクサの姿を想像しました。すると、どうでしょう、ウマノスズクサの茎をかじっているジャコウアゲハの幼虫が目の前にいたではありませんか。そして、次々に12匹ものジャコウアゲハの幼虫が見つかりました。幼虫はいろいろな段階に育っていて、わずかに残っている葉を食べたり、茎をかじったり、近くの植物に移って歩き回ったりしていました。(写真③、④)

多数のジャコウアゲハの幼虫が、数本しか生えていなかったウマノスズクサをほとんど食べ尽くしていたのです。サクラソウ自生地の希少なウマノスズクサを食べたのだから、ぜひ立派に育って欲しいと願ったのですが、残り少なくなったウマノスズクサの茎を見て、全部のジャコウアゲハの幼虫が無事に育つのは無理のように思えました。

今年(平成13年)もウマノスズクサの花の季節がめぐってきましたが、今のところジャコウアゲハの幼虫に食べられていないようです。しかし、8月中旬までの観察では3株しか見当たらず、しかも、茎は1mほどと短くて花も蕾も着いていません。株数が少なく、生育状況が貧弱なのは、去年ジャコウアゲハに食べ尽くされたことが影響しているのでしょうか。来年は株数も殖え、生育状況も良くなることを願っています。

(田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査検討委員会委員)



③茎をかじっているジャコウアゲハの幼虫 (平成12年9月19日撮影)

④堀になる場所を探して歩き回る終令幼虫 (平成12年9月19日撮影)

さくらそう通信 13号 平成14年3月20日

編集・発行 さいたま市教育委員会

さいたま市常盤6-4-4 ☎048-829-1721